

今回は成田高等学校のルーツの一つである、成田英漢義塾についてお話しします。

成田英漢義塾は明治20(1887)年10月3日に設立されました。設立当初の塾則である「成田英漢義塾概則」によれば、塾は2学期制で、前学期が9月から2月、後学期は3月から7月でした。もちろん、9月入学でした。少し前に、東京大学が9月入学を検討すると発表しました。世界のほとんどが9月入学ですので、それに対応しようということですが、なかなか前に進んでいないようです。それだけ、日本では4月入学が根強いからでしょう。しかし、まだこの頃は9月入学が普通だったようです。名前の通り英語と漢学を教えていましたが、その他に数学の授業もありました。また、仕事で昼間に通学できない生徒のために夜学科が設けられていました。塾というと、皆さんは普段通っている学習塾を想像してしまうかもしれませんが、ここまでくると、もう本格的な学校ですね。実は、これには明治時代初期の教育政策が大きく影響を与えていたのです。

さかのぼること、明治5(1872)年、有名な「学制」が發布されました。高校3年生の皆さんは当然知っていますよね。全国を8つの大学区に分け、1大学区に大学校1校と中学校32校を設置し、1中学区に小学校210校を設置するという、教育制度が全くといっていいほど整っていなかった当時としては、壮大な計画でした。とりあえずは小学校から作ろうということでしたが、学校の設置・運営は学区住民の負担でした。ほとんどの地域では、江戸時代以来の寺子屋を小学校にするなどして、設置が進められました。3、4年ほどの間に約2万6,000校が設置されましたが、中学校は設立がなかなか進みませんでした(『学制百年史』)。

そのような中、明治11(1878)年に県下で最初の中学校である、千葉中学校(今の県立千葉高校)が設立されました。さらに千葉県では郡に1校中学校を設置しようとの構想が県議会で提案されたのですが、時期がまだ早いとの理由で否決されてしまいました。当時はまだ、農業が産業の中心でしたので、上級の学校へ進学するのは無用のことと思われていたのです。しかし、一方で若者達の上昇志向は大変強いものでした。「末は博士か大臣か」という言葉が当時流行っていましたが、江戸時代の身分制から解放された若者達にとって、立身出世の道を目指して進んで行くことが共通した生き方でした。その入口が中学校だったのです。しかし、このように中学校の数が少なくても、その望みがなかなかかなえられませんでした。これを補ったのが当時の塾だったのです。

このような塾は当時の千葉県内でも多く見られました。この背景には、中学校へ行かなくても大学へ進学できる、あるルートがありました。明治10年に発足した東京大学の入学資格を与えるための機関として、大学予備門という学校が設置されました。これは、後に帝国大学が発足したあとの旧制高等学校となり、現在の大学の教養課程に引き継がれています。この大学予備門の入学資格は13歳以上という年齢規定だけで、入試科目も基本的に和漢学・数学・英語がほとんどでした(天野郁夫『試験の社会史』)。いたるところで設立された塾は、まさにここに狙いを定めたものでした。

成田英漢義塾の前身にあたる北総英漢義塾もまさにそうでした。北総英漢義塾は、明治17(1884)年に小倉良則によって今の成田市土室に設立され、上級の官立学校・専門学校に入ろうとする者のために設立されました(『成田市史』近現代編史料集二)。小倉は明治16(1883)年から25(1892)年まで自由党の県議会議員として活躍し、その間、県議会議長を務め、後には衆議院議員に当選して国政に進

出しました。また、成田鉄道株式会社や成田銀行を設立するなど、地域経済の立役者でもありました（小川国彦『成田ゆかりの人物伝』）。多忙となった小倉は、塾の経営を任せられる人物を探すため、かねてから交友のあった成田町の石川甚兵衛と諸岡勝太郎に相談しました。この2人は早くから自由民権運動に参加し、石川は県会議員を経て成田町長を務め、諸岡はその石川を県会に送りこもうと支えた人物でした。後に小倉とともに板垣退助や河野広中らを招いて演説会を催すほど、同士のつながりがありました。石川と諸岡は成田山新勝寺の三池照鳳貫首に相談すると、貫首はこれを快諾して成田英漢義塾の設立に至ったのです。

三池貫首は嘉永元（1848）年に成田に生まれ、明治16年に35歳の若さで住職となりました。三池貫首は塾の設立だけでなく、新勝寺裏山の官有林の払下げを受けて成田山公園を造成し、成田鉄道の設立などにも尽力され、新勝寺を発展させた高僧でした。

塾舎は今の成田山仏教図書館の下を敷地にして建てられました。下の絵がそうです。塾舎の背後の広場が今の図書館にあたります。



塾主には三池貫首が就任し、塾長には大分県中津出身の士族で、当時千葉中学校と千葉師範学校（現千葉大学教育学部）の教員であった、宮村三多を招きました。宮村は安政3（1856）年の生まれで、明治13年2月に政府の立法機関であった元老院に「国会創立ヲ請フノ建言」を提出するなど、自由民権運動の活発な運動家でした。雄弁家として知られていた宮村塾長の就任は塾生たちを刺激したようで、塾の日課が終わると演壇を作って演説会が開かれたほか、近くの町村で開かれる演説会に参加すると郡役所（当時はありません）から厳しく注意されるため、まず退学届を出し、これが終わると入学願書を出して塾に戻る塾生もいたようです。





最前列の右から4人目が宮村 ござ孫によれば英漢義塾時代の写真だが、千葉師範学校の可能性もある。(宮村定氏提供)

入学資格は高等小学校卒業以上及びそれと同等の学力を有する者とされ、修業年限は3か年でした。入塾金は50銭、授業料は1か月50銭、他に塾費として1か月5銭を納めました。塾生の服装は羽織袴に角帽で、足には高下駄という姿でしたが、明治29(1896)年から「ダルマジケツ」と称する洋服となり、現在の本校男子生徒が着用している制服の原型ができあがりました。

明治21(1888)年になると、宮村塾長は学科の程度を上げるとともに、経済・法律・植物等の科目を設け、塾生も70人を超えるまでになりました。同23(1890)年に新たに浜田義雄塾長が赴任すると、学科を倫理・漢学・英学・数学・科学・地理・歴史に分け、夜学科が廃止されました。翌年には新たに福山亀太郎塾長が赴任し、塾則を改正して授業内容のさらなる高度化を進めたものの、前年から塾生が減少し、同25(1892)年末には17名まで減ってしまいました。同様の傾向は、有名予備校(当時もそんなものがあったのです)の共立学校でも明治21年に1500人いた生徒数が、同24年には700人強とわずか3年間の間に半減しました(天野前掲書)。背景に明治19(1886)年に学校令が公布され、大学までの進学ルートが整った上、同24年に中学校令改正されて、郡市町村においても中学校設置が認められたことがあったことも考えられます。多くの予備校がこれを機に正規の中学校へ転換をはかりました。これと関連すると考えられますが、英漢義塾でも和田玉一塾長が赴任すると、同26(1893)年の4月に従来の科学を博物科・物理科・化学科とし、国語科・図画科目・体操科を新設しました。また、3学期制を採用して4月1日を学年始めとし、入学の時期もこれにあわせました。これは正規の中学校

と同様であり、中学校への移行を視野に入れていたものと考えられます。ただ一方で、商科・農科の2科を新設したことを見ると、中学校設置が認可されなかった場合のことを考えて、より設置基準の緩い実業学校に転換することも考えていたようです。しかし、これがあたったようで、明治 29 (1896) 年に塾主の三池貫首が遷化（せんげ、僧侶が亡くなること）されると、塾が廃止になるとの噂が町内に広がりましたが、翌年には入塾生が 41 名となり、在塾生 48 名と合せて 89 名に達しました。

こうして、成田英漢義塾は、成田中学校の設立に向かって準備が進められることになりました。

今回はここまでとします。

(深田富佐夫)